

今井源衛教授
退官記念

文學論叢

今井源衛教授
退官記念

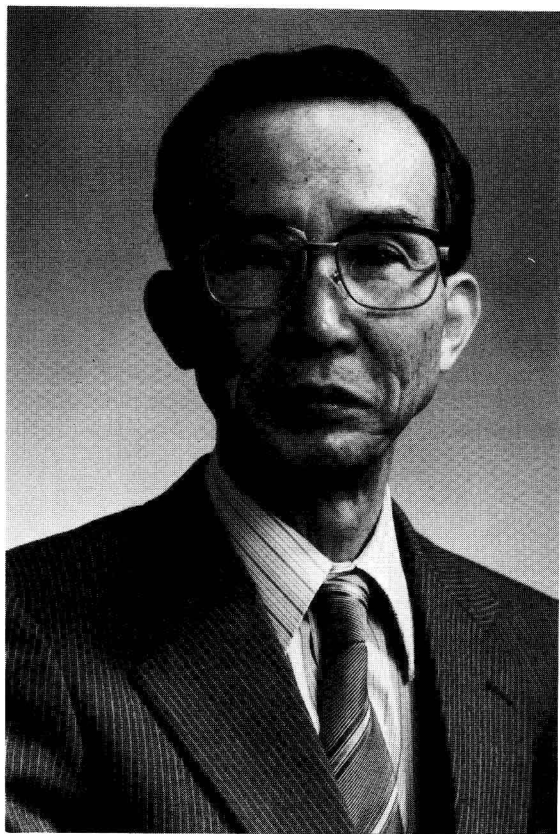
文学論叢

今井源衛教授退官記念 文学論叢

昭和五十七年六月一日 印刷
昭和五十七年六月十日 発行

編集者 今井源衛教授退官記念
文学論叢刊行会
印刷所 川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭六一四

発行所 九州大学文学部
国語学国文学研究室
812 福岡市東区箱崎六丁目
振替 福岡六一四二三六六



今井源衛教授 近影

序 文

今井源衛教授は、昭和五十七年四月一日を以て九州大学を定年退官された。会者定離とは言いながら、改めて惜別の情禁じ得ないものがある。

本学教官としての先生の在職期間は四半世紀を超え、その講筵に列した者は、専攻学科生だけでも四百数十名に達する。現在我が国語国文学教室は、漸く全国的にも大きな評価をうけつつあるが、これは一に先生の御努力の賜と深謝する次第である。一方、学者としての今井先生の業績はここで蕪辞を連ねるまでもなく周知の所。

『国文学やぶにらみ』という御近著では、いわゆる文芸学と文献学との関係が説かれるが、まさに先生こそその両面を究められた学者と言えよう。

ここに知友門人相集い、今井教授退官記念の論集を編んで先生の御業績をたたえ、以てその御厚恩に報ずべき一端と致したく企てた。

今井先生、後輩どもの心尽くしの一冊として、幸いに御嘉納賜わらん事を。

巻頭の御近影でもうかがえる如く、先生は心身ともにますますお元気で、「定年」という言葉にも違和感を覚える程であるが、更に御退官後も梅光女学院大学におつとめのかたわら、着々と御研究の歩度を加えられつつある由承っている。

今後とも一層御自愛と御加餐を専らにせられ、我々後輩どもを御指導下さるよう祈念して、一言序文にかえる。

昭和壬戌の年 四月

奥村三雄

今井源衛教授
退官記念

文学論叢

目次

擬作論

『源氏物語絵巻詞』における国語史的事象

——仮名遣・音便・字音表記——

『源氏物語』帚木三帖の序跋と階層論について

歌枕須磨をめぐって

——『源氏物語』以前以後——

『寝覚』の女君

——第一部における運命と性格——

『夫木和歌抄』卷三六「言語」考

祐徳本「宗長道之記」をめぐって

付、新資料柿衛文庫蔵「賦何人連歌」

啄木とクロポトキン

蓬生・関屋巻の成立

『伊勢物語』二段を考える

——挿入句「いかと思ひけん」の表出意図について——

平家物語「殿下乗合」をめぐって

斎宮女御徽子の六条御息所への投影

中村幸彦……………11

春日和男……………31

迫徹朗……………49

島津忠夫……………63

野口元大……………83

荒木尚……………101

重松裕巳……………117

助川徳是……………141

伊藤博……………157

吉田達……………175

笠栄治……………199

西丸妙子……………223

釈 蓮 禪

承和への憧憬

——文化史上の仁明朝の位置——

菅 原 在 良

——その伝と文学活動——

大鏡と伊勢物語

平安朝における「文人」について

『賀茂保憲女集』底本の問題

泣不動の説話の成立と展開

藤原道信集の成立について

都 良 香 伝 考

『我身にたどる姫君』の一面

——ある女系の「年代記」——

路 通 と 曾 良

——新出資料によるスケッチ——

翻刻・『洛陽花下里村昌逸法眼門人帳』

付・玄碩門人帳

金 原 理……………243

後 藤 昭 雄……………263

福 井 迪 子……………279

森 下 純 昭……………305

工 藤 重 矩……………325

古 賀 典 子……………343

南 里 み ち 子……………363

中 島 あ や 子……………377

中 條 順 子……………401

辛 島 正 雄……………425

白 石 悌 三……………443

石 川 八 朗……………457

芥川龍之介「六の宮の姫君」と堀辰雄「曠野」の比較考察

——歴史小説としての性格規定の試みを中心に——

海老井 英 次……………481

平曲の音楽性のことば

奥 村 三 雄……………497

寺町百菴の前半生

——享保の遊俳——

中 野 三 敏……………515

定家以後の仮名遣

迫 野 虔 徳……………543

六条院構想の成立に関する試論

——四人の女君の人物像をめぐって——

田 坂 憲 二……………559

『我身にたどる姫君』人物索引

今 井 源 衛……………577

今井源衛教授略歴……………589

今井源衛教授著作目録……………591

後 記……………604

今井源衛教授
退官記念

文学論叢

擬作論

中村 幸彦

一

本居宣長は、その『玉勝間』二の巻で、清少納言が老後、陸奥の松島に下ったと云う『松島日記』と、菅原道真が、太宰府左遷の途次、須磨で書留めたという『須磨記』を「偽書」イフヘリヲミと評し、

すべて近き年ごろは、さるいつはりぶみをつくり出るたぐひの、ことに多かる、えうなきすさびに、おほくのいとまをいれ、心をもくだきて、よの人をまどはさんとするは、いかなるたぶれ心にかあらむ、よく見る人の見るには、まこといつはりは、いとよく見えわかれて、いちじるけれど、さばかりなる人は、いといとまれにして、えしも見わかぬもののみ、世にはおほかれれば、むげの偽りぶみにもあざむかれて、たふとみもてはやするは、いともくかたはらいたく、かなしきわざ也

と述べている。国学者、古典学者宣長としては一応もつともながら、彼にも、戯れか真面目かは論の存する処だが、『源氏物語』を補う一篇『手枕』の作がある。少々大人気なくも感じられる。以上の二書の著者の、その時の気持

などを忖度して見るゆとりが、欲しかったとも思われる。現に今日から、問題の二書を、それ〴〵文学作品と眺むれば、上手下手の差こそあれ、『手枕』と同じ群に属すると、見えないこともない。早速その作品に対することとする。

二 須磨記

この書については、私は嘗て略述して（『文学』昭和五十二年八月号「白太夫考」）、詳しくを別稿に托したことがある。宣長も、「やゝよにひろごりて、たれもまことと思ひたしめる」書で、文化七年には刊本さえ出た。写本の残るものも夥しく、見得る限りを検討する正攻法は、一寸採り難い。やや信用できそうな写本に求める略式でのぞむことにする。

大阪天満宮文庫の一本（整理番号、貴・三・三）は、まがうべくもなく奚疑齋沢田一斎こと京都書肆風月庄左エ門の筆写にかかる。「奚疑齋藏書」の藏書印も備わる。この本の奥書は、

此一書加州金沢川嶋氏より到来してうっし了ぬ、尤殊勝之御記也 朱字傍注（花押）

右須磨記一帖借速水氏藏本書寫一校畢 寛保紀年季秋 奚疑齋

とある。この花押は「義」の字を用いたもので、後出の別の写本（天満宮文庫、三・四）にも、殆ど同じ文章があつて、花押の処を、「壺井義知判」とする。この奥書及び、「朱字傍注」とある、平仮名の多い古語に漢字を当てたその漢字を附した写本は、頗る多い。漢字の方は、若干省略したり不注意で落したものもあるが、全写本に及んでいのかと思われる程である。義知は京都仁王門通新高倉西入ル清光寺にある墓誌（伊藤東涯撰）によれば、字安左エ

門、号鶴翁、大阪生れ京都住、本朝典故の学に詳しく、幕府へも召された著名人である。享保二十年（一七三五）十月二十四日、七十九才歿。なお門人多田義寛（又義俊、号南嶺）の『蓴菜草紙』^{ねなは}には、元来河内国石川郡壺井の農家の出、大阪へ出て商家に仕えた。その後、一時加賀に遊び、その縁で、四辻家をたよって、上京、有職学に入ったともある。それからすると、この奥書の「金沢川嶋氏」は、彼が加賀にあった時の知人ではなからうかと思われる。試みに加賀藩の文人伝『燕台風雅』に求めるに、恰好な人物が見出せるではないか。その巻八に所載の河島正卿号南楼、その人である。その伝によると、南楼は通称島屋与三兵衛と云う金沢の商家であったが、漢詩をよくして、その詠は『八居題咏附録』（享保六年刊）に見え、正徳年中には韓国の使臣と唱和して『雞林唱和集』（正徳元年刊）に載る。湯涌温泉十勝詩の遺卷（享保十二年五月）も残る。一方、中院通躬卿に入門して、和歌をもよくしたと云う。四辻家へ義知を紹介したのはこの人かも知れぬとさえ思われる。これで見ると、宣長から偽書ときめつけられたこの『須磨記』は、南楼と義知の手を通じて流布し、或はこの二人が作り上げたかと思われなくてもない。が、そこまで急ぐことはまだない。奚疑斎がこれを写した寛保元年（一七四一）は、義知歿後からでも六年後であることに注意して、本文の検討に進む前に、も一つの写本を見よう（前出天満宮文庫、三・四）。この本にも義知の奥書を写し、本文には漢字を当ててある。扉紙の裏に次の記がある。

菅贈大相國貶大宰府之行、至須磨記一卷、感恨不少矣、管（菅カ）氏之縉紳六家、高辻、五條、唐橋、東坊城、桑原、清岡、皆失之於中古之兵火、不傳于子孫也、加賀條某卿、得一本於金沢府、贈傳写本各一部諸管家也、別出自筑前一商夫之本、合彼加賀本、大同小異、今左（在カ）清家文庫也、以兩本一過校合之、粗如版正本、讀者正其漆（添カ）塵、多田義俊書豊軒、

これは転写本と見えて、若干誤写と思われる処がある。推量の文字を当てて見たが、なお不明の「加賀條某卿」の

処は、これと大同小異の文章を持つ別の本（天満宮文庫、三・六）には、この処「加賀参議某卿」とある。参議とは、四位以上の人のなるもの、よって加賀参議とは、加賀宰相とも称された藩主代々の前田氏の外はない。如何にも下手な漢文であるが、これを見ると、南楼、義知と渡ったものが、加賀参議が得た本らしくもあるが、本文には、加本、筑本として、校異（と云っても内容の変るようなものは一つもないが）を書入れてある処を見ると、又別本らしい。この文章によると、今まで全くなかった『須磨記』がこの処で、三本出現したこととなる。これはおかしい。加賀前田家は菅原姓で梅鉢を家紋とする。殊に本好きの松雲公（綱紀）が『菅家文章』を集めている（日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』解説参照）噂は、その筋では聞えていたはずである。筑前は、太宰府天満宮の所在地。余りにももつともそうな処から出現したのがかえって疑わしい。この書には又「義俊按」の文字も見えて、朱で二十数ヶ処の注がある。南嶺のものを見てよい。その中には、『菅公袖日記』『菅原経住記』『兼視王家集』（『国朝書目』に『兼覽王集』を所載）など、聞いたこともない書を引用してある。伊勢貞丈から「彼が著述ノ書ノ、引書疑シキ者多シ」（安斎隨筆）と評された彼のこと、あぶなっかしくてならない。なおこの書には墨書の注やイ本との校合もあって、巻首に「墨校入江昌喜」と見える。この昌喜の注は専ら漢籍や歌集からの引用の指摘である。

これだけ見た上で、本文の特色をうかがう。第一に、日本古文の語学的研究の進歩は有難く、今ではもう誰が見ても、これを菅公の文と見る人はなく、殆どの人は近世の文章と見るであろう。それについては引用の必要すらあるまい。第二に、有職故実に関心のある人の手になるもので、官位など一々に有職家的訓み方で記し、それがかなりの数に上っている。第三は、恐らく京都をよく知った人の手で、京中で菅公ゆかりの地を、「高辻のたち」（『拾芥抄』）に見えて、菅大臣社のある処（「醒井の常楽院の僧房」（醒井天神に関係ある処か）「五条あたりの家さと」（『拾芥抄』）に見えて、後の紅梅殿の処）「西朱雀なる正像寺のかたはら」（未詳）などを並べてるのは、若干考証めいたこ